

[書評] 絵所秀紀・山崎幸治編著『アマルティア・センの世界 経済学と開発研究の架橋』

著者	佐藤 創
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	46
号	1
ページ	93-97
発行年	2005-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/276

絵所秀紀・山崎幸治編著

『アマルティア・センの世界
経済学と開発研究の架橋』

晃洋書房 2004年 v+243ページ

さとう はじめ
佐藤 創

アマルティア・セン (Amartya Sen) は1998年のノーベル経済学賞受賞者である。アジア出身者で初の受賞という意味でも、主流派とはみなしえない研究者の受賞という意味でも広く関心を集めたことは記憶に新しい。周知のとおり、他の5賞がノーベルの遺言によって設けられてより1世紀以上の歴史を持つのは異なり、経済学賞は1969年にスウェーデン銀行創立300周年を記念して創設された新しいものである。しかし、いわゆるシカゴ学派の受賞者が多く、また1997年の受賞者が後にヘッジ・ファンド破綻事件に関わるなどしたため、例えば、ノーベルの遺族が経済学賞はノーベルの遺志^(注1)に沿うものではないと公然と表明したり、文学賞を選考するスウェーデン・アカデミーは経済学賞(王立科学アカデミーで選考)からノーベルの名を除くべきだと提案したりもしている。そうした文脈では、センの受賞は広い支持をうる、言祝ぐべきことであっただろう。なぜなら、センの取り組んできた問題は貧困、不平等、開発そして自由など、人類にとって非常に重要なテーマだからである。

しかし、ノーベル経済学賞がセンに与えられたのは、厚生経済学とくに社会選択論における彼の貢献によるとされ、不平等と飢饉に関する仕事に若干触れられたものの、1985年以降の彼の業績にはほとんど言及がなかった。センの仕事を注意深くフォローしてきた者は複雑な思いを抱いたかもしれない。なぜなら、第1にセンの思想は様々な問題を徐々に内

包しつつ、ねばり強く進化・深化し続けているからである。第2にセンが経済学学界に限らず広く知られているその理由は、途上国の経済発展・社会開発により直截に関わる仕事によってであろうからである。セン自身も受賞時のノーベル・レクチャー「社会選択の可能性」では、1985年以降の彼の軌跡も含めたできうる限り広い問題を扱っている^(注2)。

つまり、センの業績の全体像を捉えるには社会選択論の高度に理論的な研究だけでなく、それが不平等や貧困、開発などの現実的問題に取り組んだ研究と密接に結びついて今なお発展しつつあることを知る必要がある。実際、本書を読むと明らかのように、センはいずれの分野でも研究レベルの飛躍をもたらすような貢献をしている。それゆえにこそ、センはあまたの経済学者の中で特異なそして傑出した学者なのである。

その観点から、本書はセンの業績に関心を寄せ、彼の仕事を広く涉猟し、理解したいと希望している者にとって非常に有益な書物である。なぜなら、本書のねらいは副題に示唆されているとおり、社会選択論のみならずセンの広い領域に及ぶ学問活動、具体的にはセンの開発思想・開発研究を紹介し検証することにあるからである。この領域のセンの仕事は日本では十分には紹介されてこなかったもので、まさにこの間隙を埋めるものでもある。また、執筆陣は開発の様々な分野の気鋭の研究者であり、センと研究のうえで直接交流した経験のある者が多く含まれていることも本書を内容豊かなものとしているように思う。

本書は、序章に続く2部からなり、各章の構成は以下のとおりである。

- 序章 アマルティア・センへの招待 基本
概念を中心にして (野上裕生)
- 第部 センコノミクスの視座
 - 第1章 センの市場経済論 (山崎幸治)
 - 第2章 アマルティア・センと社会選択論 (吉原直毅)

- 第3章 貧困・不平等研究におけるセンの貢献
（黒崎卓）
- 第 部 セン開発研究の射程
- 第4章 センのインド経済論と開発思想（絵所
秀紀）
- 第5章 インド社会・政治研究とセン 民主
主義と多元主義の擁護 （佐藤宏）
- 第6章 現代アフリカ研究とセン 比較開発
学のための試論 （峯陽一）
- 第7章 センとジェンダー 構築的普遍主義
へ （山森亮）
- 第8章 人間開発指数とセンの経済思想 指
ではなく月を観る指標 （中村尚司）

序章はセンの思想を理解するうえで不可欠な基本概念を解説する。センの用いるタームを正確に理解することは非常に重要である。なぜなら、センは既存の比較的ありふれた単語に独自の意味・解釈を与えることによって、新しい視点を打ち出していることが多いからである。例えば、ファンクショニング、ケイパビリティ、不平等、コミットメント、自由、エンタイトルメントなどである。それらを、基本概念、自由の概念とその周辺、政治経済学の基本概念という3つの領域に整理し、それぞれの意味内容のみならず、どのような文脈でセンがこうした用語を採用したのか、その背景にある問題意識はなにかということまで、先行研究に触れながらわかりやすく説明している。

第 部はセン経済学の土台である厚生経済学に関連した業績について論じる3章からなる。

第1章はセンの市場経済に関する考えを紹介し、センは市場経済を肯定・否定の二分論ではみないこと、その根源には効率性と同時に帰結の配分の問題をも重視する姿勢があることを示す。まず人間の行動原理についてセンは新古典派の経済的合理性の仮定を批判し、共感やコミットメントなど深い人間観に基づく重要な考えを提示したことを解説する。次に、センは厚生経済学の基本定理を再検討することで、ケイパビリティといった概念に依拠しながら、自由や福祉そして不平等について市場の機能を公平

に考察し、新たな見方を提示していることを示す。このようにセンの市場経済論を検討して、利己主義的な人間像という画一的な見方を退け、人間と社会に関する多元的な見方を経済学へ取り戻そうとするセンの試みを描き出している。

第2章は社会選択論の領域でのセンの業績を紹介する。この分野で一世を風靡したアロー（Arrow）の不可能性定理は投票のパラドックスを一般化したもので、決定のメカニズムが4つの公理をみたすならば社会厚生関数は存在しないという衝撃的なものである。センの主たる貢献がこの不可能性問題を理論的に解決・解消しようと同定理を詳細に検討し発展させたことにあることを解説する。まず、個人間の効用比較や民主主義的な集計条件など、不可能性定理を構成する諸公理をどのようにセンが再検討したのか、また社会的厚生関数に対してセンが示した代替案（社会決定関数）を紹介し、その中で生じたセンの自由主義的権利論をめぐる論争を概観する。さらに、センの「ケイパビリティの平等」論に迫りつつ、近時の分配的正義論の動向を紹介している。

第3章は貧困・不平等の理解に対するセンの貢献を紹介する。まず、貧困について、『貧困と飢饉』[Sen 1981]までは所得により個人の厚生を計測するというアプローチに留まる中でも、貧困の概念・指標を厳密にすることで貧困層内部の異質性を示し、貧困計測のあり方を公理として提示したことを論じる。その後のケイパビリティ・アプローチは所得に着目するアプローチ自体を乗り越えようとするもので、ファンクショニングにより計測するアプローチへ発展したことを指摘し、その内容や含意を分析する。次に、不平等について、ここでもセンはいくつかの公理を提示し、それをもとに諸不平等指標の特徴を検討したことを論じ、さらに所得分布からケイパビリティ・アプローチによる計測へと至る思索の軌跡を追う。このように、公理的方法とケイパビリティという観点からセンの貧困・不平等研究を捉え直すことにより、社会選択論との思想的・方法論的な継続性を浮き彫りにしている。

第 部はインターディシプリナリーな広がりをもせるセンの開発研究を紹介する5章からなる。

第4章はセンの母国インドとセンの開発思想との関わりを論じる。まず、1950年代後半からセンは持続的成長という長期の目標と雇用創出という短期の目標とを同時に達成しようとしたインドの第2次5カ年計画に刺激されて、工業部門における技術選択の問題に取り組み、また農業の技術選択についても先駆的な仕事をしていること、しかもその抽象的な理論モデルがインド社会を念頭においていることを紹介する。次に、1970年代後半にはエンタイトルメント概念による飢饉や貧困の分析へとセンの思想は深まり、43年のベンガル飢饉やインドと比べ貧困削減に成功していた韓国、スリランカの経験を実証的に論じるなど、理論と歴史とが明示的に結びついた論陣を張るようになったことを描写する。1980年代に入ると、センはケイパビリティ・アプローチを提案し、飢饉防止と民主制、貧困削減と公共活動との関係に思索を進めていく。このように、センの開発思想が展開してきたその背後には、常に母国の経験に対する深い問題意識があったことを明らかにしている。

第5章はセンのインド社会政治論を検討する。まず、センが多元主義、民主主義を擁護していることと1990年代のインドの政治的状況とが密接に関わっていることを論じる。次に、経済自由化論争でのセンの分析が自由化政策の政治的な側面にも踏み込んだもので、参加的発展や公的支援保証を強調することによって市場と国家の補完性をめぐりだし、協同活動をこれに付け加えている点で、折衷主義を超えずぐれて政治経済学的なアプローチになっていると指摘する。また、こうした方法論に基づいた公共活動と民主主義に関するセンの議論が、インドと他地域との比較とインド国内の多様性の分析とにどのように適用されているか長短を考察する。最後に、多元主義の擁護が、直接的にはヒンドゥー至上主義への対抗であるものの、価値の多様性、個人の選択の重要性、批判的理性の働きなど、より広い社会認識のあり方に及び、現代世界への新たな価値発信となっていることを論じる。

第6章はアフリカ研究との関わりでセンのアプローチに光をあてる。まず、センのアフリカの貧

困・飢饉研究と歴史学者アイリフ (Iliffe) の研究とを比較し、前者がエンタイトルメント概念によりアジアとアフリカの共通性を明らかにしているのに対し、後者は土地人口比の違いに着目し、アフリカにおける貧困層の流動性を重視していると指摘する。次に、飢饉における疾病や暴力の役割を等閑視しているといった人類学者デワール (de Waal) によるエンタイトルメント理論批判をめぐって、どのようにセンのアプローチを深めることができるのかを考察する。さらに、地域比較に関して、女性の地位や栄養状態について他の途上国がアフリカから学ぶべきことがあると論じたセンの比較手法を検討・敷衍し、開発研究の地平を広げてきたセンの研究を引き継いでいくことが重要であると結んでいる。

第7章はジェンダーとセンを論じる。まず、フェミニスト経済学の学説史を新家庭経済学とマルクス主義フェミニストによる家事労働論争とから紐解き、その1990年代の展開を合理的経済人 (= 男) 批判をめぐって紹介する。次に、フェミニスト経済学が提起した相互依存性の問題とセンの社会選択論の並行性を指摘する。さらに、行為主体と福祉を区別するセンの分析は、欲求に基づく選択のみに焦点をあてる経済学を批判し、また家計内の分配を重視してきたフェミニズムと類似していることを明らかにする。センの議論をジェンダーに引きつけて用いる際の留意点は、所得をケイパビリティに置き換えることによって人間の多様性を取り入れることができるものの、その差異への敏感さは潜在的なものであることだと論じ、センへのフェミニスト議論の含意には、例えば自由の問題やケイパビリティのリストの具体化が挙げられると考察している。

第8章は人間開発指数とセンの経済思想を考察する。まず、月をさして指をみるというような愚かさに関りがちな我々の性をアフガニスタンの石仏破壊事件から説き起こし、センがどのように月そのものを観ようとするかをケンブリッジ資本論争に関するセンの論文を紹介しながら描き出す。次に、貧困の解消をめぐって、一元的な経済成長指標に反発し、多様な社会経済指標の模索を行ったセンの軌跡をたどる。さらに、センのケイパビリティ・アプローチ

は様々な機能を達成できる自由を視野におくことによって広い社会関係から経済的な貧困が生まれる仕組みを解きほぐせるようにしたと解説する。最後に国連開発計画の人間開発指標を検討し、センによれば社会関係に根拠をおくアプローチが重要となり、その意義は、開発援助のあり方の再考、環境保全の重視など広い範囲に及ぶことを論じ、代替的な社会経済指標を提案している。

以上の各章のほかに、センの人物評伝、日本の貧困研究との関わり（以上、野上）、ベンガルの文人としてのセン（臼田雅之）について綴った3つのコラムと、センの主な著作をほぼすべて網羅していると思われる充実した参考文献リストが含まれていることも特筆すべき本書の特徴である。評者もまたセンの膨大な仕事を断片的にフォローしているのみで、本書に接してはじめて「アマルティア・センの世界」をおぼろげながら把握できたように思う。紹介したように、社会選択論における理論的な考察を基礎としつつ、貧困、不平等、開発、民主主義、ジェンダー、自由など多くの領域を横切って思索を進めるセンの学問的営為に本書は様々な角度から光をあて、その半世紀近くに及ぶ思索を有機的かつ立体的に描き出している。ここでは、一人の学者の多岐にわたる業績をそれぞれの分野の研究者が紹介するという本書の性格上、各章を通底して得られる基本的な知見のみ触れることにしたい。

第1に、各章に共通するメッセージは、センの思想の核心には社会や人間の多様性を重視する姿勢があり、彼が提示してきたアイデアやアプローチを建設的に発展させていくべきである、というものである。開発ないし開発研究に関わる者が直面する貧困や不平等といった途上国の切実な問題について、センは従来の経済学では十分に扱い得なかった論点を取り上げ、多くの分析道具を考案し、理論と現実とを成功裏に結びつけるアプローチを模索してきたことが本書を読むことによって明確に理解できる。実際、センが用いた単語やアイデアは、おそらくセン

なくして従来の経済学では受容されないものであっただろう。こうしたセンの貢献を発展させていくことが重要だという主張はまことに説得的である。

第2に、各章に変奏されつつ描写されるセンの学者としての姿勢に共通性を見いだすことができる。例えば、開発経済学の死亡宣告に対するセンの批判のあり方、すなわち「構造主義の限界を指摘し、あわせて新古典派経済学を乗り越える論点を示す（第4章）」というスタンスに端的に表れているとおり、センは主流派であれ非主流派であれ、どんなスクールにも属さず、また市場と政府、自由と平等といった単純な二分論も退け、様々な主張に十分に目を配りつつかつその「間」で、あるいは「超える論理」（第5章）で、常に思索していることを理解することができる。センのこのような謙虚かつラディカルな透徹した姿勢に読者は真の学者とはこういうものかと感銘を受けるに違いない。

こうした点は、センの業績に馴染みのない読者でも十分に味わうことができるだろう。さらに、本書はセンの世界を紹介するという目的ゆえに幅広い読者層を意識しているものの、同時に専門性も高いものとなっている。最近の研究動向やセンの研究に対する批判にも十分に触れながら、センの研究を位置づけているからである。もちろん、本書で明示的には取り上げられていない批判もある。評者の関心から経済学の基本的な枠組みであるミクロとマクロの関係と短期と長期の関係の2点のみについて触れてみたい。

第1に、エンタイトルメント・アプローチの厳密なモデルはミクロ経済理論に依拠している^(注3)。しかし、そのアプローチが適用された飢饉の説明では職業グループが重要な役割を果たしており、社会は均質な個人から構成されると観念するミクロ経済理論の仮定とは相容れない現実の社会関係を前提とした説明を展開している。つまり、センの思想にはミクロとマクロとの、より一般には個人と社会との間の緊張関係が内包されている〔Fine 2001〕。第6章で取り上げられている飢饉における暴力や疾病の役割もまた、社会は均質な個人の集計以上のものだという意味での「マクロ」的な問題を、一般均衡の枠

組みをその基礎に持つエンタイトルメント・アプローチで説明できるのかという問題だと解釈することもできるだろう。この問題は、財を物差しとするエンタイトルメントからファンクショニングに着目するケイバピリティへの理論的な発展によって解消されているのだろうか。さらに、この批判は複雑な個人と社会の関係を分析するのに「市場」という一般的な概念を出発点とすることが適切なのかという論点にたどり着く。

第2に、いくつかの章で紹介されているように、センは貧困削減について成長媒介保証戦略と公的支援主導保証戦略を区別し、いずれの場合でも公共活動が重要であることを指摘することにより、新しい視点を切り開いた。ここで、センは経済成長の重要性を長期的には認めているものの、公的支援主導保証の可能性をより強調している。この論点に関連して、センは中国について改革開放以後高い経済成長率にもかかわらず死亡率や平均寿命が悪化したと指摘し、経済成長が必ずしも生活の質の改善に貢献しない例として提示している[Sen 1989]。しかし、この実証自体正しくないという指摘があり、貧困削減における経済成長のより短期に果たす役割を軽視しすぎているという批判がある[Nolan and Sender 1992]。この議論が孕んでいる問題は、公共活動や貧困領域の2つの戦略の関係を考える際に、短期・長期の区別およびその関係をどう考えればよいのかということである。

もちろん、あるいは的はずれかもしれぬこうした批判に対する答えをすべて本書に求めることはできない。また、センのアプローチに対する毀誉褒貶とその程度が論者・読者ごとに異なるのは自然である。むしろ重要なのは、センという希有な学者の思想を丁寧に吟味し、その貢献を十分に理解したうえで、読者がそれぞれの関心に引きつけて自ら考えることであろう。その点、本書が、多岐にわたるセンの業績を魅力的に掘り下げて紹介し検討する文献と

してきわめて優れた書物であることに疑いはなく、開発研究や経済学の研究者、広くは開発一般に関心を持つ幅広い読者をセンとともに深い思索の旅へといざなうものであることもまた疑いない。

(注1) よく知られているように、ノーベルは「その前年に、人類に偉大な福利をもたらしたもの」(those who, during the preceding year, shall have conferred the greatest benefit on mankind)に賞を授与するよう指示している。

(注2) センのノーベル経済学賞受賞に関するプレスリリースやレクチャーは、ノーベル財団のサイトでみることができる。<http://www.nobel.se/index.html>

(注3) 数学的な取り扱いとは『貧困と飢饉』の英語版Appendix Aを参照のこと。一般均衡理論の集合論的アプローチを用いて非市場的な要素(エンタイトルメントへのアクセス)を組み込む形になっている。

文献リスト

- Fine, B. 2001. "Amartya Sen: A Partial and Personal Appreciation." Centre for Development Policy and Research, School of Oriental and African Studies, University of London, Discussion Paper 1601.
- Nolan, P. and J. Sender 1992. "Death Rates, Life Expectancy and China's Economic Reforms: A Critique of A. K. Sen." *World Development* 20 (9): 1279-1303.
- Sen, A. K. 1981. *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*. Oxford: Clarendon Press (邦訳は黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢饉』岩波書店 2000年)。
1989. "Food and Freedom." *World Development* 17 (6): 769-781.

(アジア経済研究所開発研究センター)